



料金から機能、コンテンツまですべてがわかる ついに登場

しモード

家庭の電話機からメールの送受信やウェブページの閲覧などができる「Lモード」が始まった。昨年10月から約半年にもわたりNTT法に抵触するかどうかの議論が行われたためか、その知名度は高い。しかし、具体的な部分に関してはあまり知られていないのが実情だ。そこで今回は、Lモードについて実際に導入する際の参考となるような部分を探ってみよう。

菅野 哲

家族単位のインターネット

6月29日、ついにLモードがスタートした。すでに一般的になるまでに普及したiモードに似たサービスだが、携帯電話というビジネスマンや学生に普及したパーソナルユースのデバイスのうえで提供されるサービスと違い、家庭という単位で存在する固定電話を使って提供されるサービスだけに、求められるコンテンツには大きな差が存在する。

NTTはLモードサービスを提供するにあたって、「日々の生活に役立つ」(Living)、「地域に密着した」(Local)、「在宅時間の長い主婦のかたに」(Lady)をキーワードにし、それまでインターネットに縁遠かった人でも簡単に、そして役に立つ情報にすぐアクセスできるようにしたという。

それまで、限られた人のものであったインタ

ーネットの裾野を広げ、そこにあるコンテンツを新しい時代のものへと導くことができるのか興味のあるところだ。

それでは、Lモードが実際のところどのようなサービスなのか、端末の購入からコンテンツまでインターネットユーザーが知りたいLモードの実体について調べてみたので、サービスに加入する際の参考にしてもらいたい。

ちょっと気になるLモードのナゾ

「Lモードって固定電話版iモードだろ」といったイメージはできて、ちょっとした疑問がでてくるだろう。ここではそんな疑問に答えよう。

Q1 料金は?

A 月額使用料は200円と「インターネット接続等利用料」100円の計300円。「iナンバー」、「ダイヤルイン」を利用している場合は利用番号の数だけ契約できるが、契約数分の使用料が必要だ。

通信料はもよりのLモードアクセスポイントまでの通話料(市内ならば8.5円/3分)が必要になる(6月現在、国内電話加入者の約8割は市内料金でアクセスポイントに接続できる)。また「タイムプラス」などの割引サービスもそのまま適用される。

ICカード公衆電話からサービスを利用できるカード「Lモードカード」は、1枚500円の発行代金が必要になる。

Q5 マイラインは?

A マイラインやマイラインプラスでNTT以外の電話会社を選択しても利用できる。なお、アクセスポイントまでの接続はNTTの回線を利用するが、ウェブページ上にある電話番号をクリックすることで電話をかける「Phone to 機能」を利用するときはマイラインで契約している

電話会社を使って接続される。

月額使用料 (NTT東日本 / 西日本)	200円 / 月	1
インターネット接続等利用料 (協定事業者)	100円 / 月	
通話料 (アクセスポイントが同一区域内にある場合)	8.5円 / 3分	
Lモードカード発行代金 (希望者のみ)	500円	

注) 料金はすべて一括してNTTから請求される。

1...Lモード使用料180円+メッセージ到着お知らせ使用料20円

Q2 回線がADSLやISDNでも使える?

A 端末にはアナログ回線用と、夏ごろ発売となるISDN回線用の2種類があり、ADSLならアナログ回線用のものを、ISDNならISDN回線用の端末を接続すればよい。また、Lモード対応TAを購入すれば、それを通してアナログ回線用でもISDNに接続できる。なお、従来のTAでもファームウェアのアップデートによりLモードへの対応ができる。

Q4 メールは?

A Lモードで利用できるメールサービスには「Lメール」と「Sメール」がある。両メールの違いは下の表を参照してほしい。メールアドレスのドメインは、Lメールだと「OO@pipopa.ne.jp」、Sメールだと「OO@s.pipopa.ne.jp」で、@の前は先着順でマイアドレスとして好きなアドレスを選べる。

「0312345678@pipopa.ne.jp」のような

	最大文字数	メールアドレス	アナログ回線での利用	ISDN回線での利用
Lメール	2000	@pipopa.ne.jp	可	可
Sメール	40	@s.pipopa.ne.jp	不可	可 1

1...ISDNのDチャンネルを利用

Q3 接続スピードは?

A アナログ回線の場合は端末によって差が出るが、iモードと同じスピードの9600bpsから33.6kbpsの間だという。ちなみに、ISDN回線では32kbpsだ。

なお、アナログ回線の場合は、インターネットへの接続が確立するまで20秒程度かかるのに対して、ISDNの場合は2、3秒で接続される。

電話番号形式も利用可能だが、イタズラメールの増加も予想されるため、マイアドレスでの利用が推奨されている。

なお、各端末ともメール作成はオフラインで行う仕様になっており、そのあいだの余計な課金は発生しない。

現時点では、Lモードの端末からはプロバイダーのPOPサーバーに接続できないため、プロバイダーのメールアドレスをLモードで使用する場合は、転送サービスを利用することになる。



Q6 機種による違いは?

A 現在のところ機種間の大きな違いとしては、FAXの有無がある。FAXがあれば、Lモードの「FAX TO 機能」でFAXサーバーからFAXを使って情報を引き出したり、メールをプリントアウトしたりできる。Lモードならではの機能をフルに活用したいのならばFAX付きのものを選ぼう。

それに対してメーカー間での違いは、ほと

んどない。現在のところNEC、松下、シャープの3社が端末を開発しているものの、モノクロの液晶画面や数字ボタンを使った文字入力の方法など、どれをとっても似たような仕様となっている。価格も5万円から6万円とあまり差がない。

しかし、Lモード対応機種を開発に関してNTTは各メーカーに任せているため、今後独自の機能を搭載した端末の登場も期待できる。実際、すでに液晶画面のカラー化やLモード

アクセスができる子機などの開発が検討されている。市場が拡大すれば、携帯電話以上に機種間の違いなどがクローズアップされるようになり、携帯電話のようにユーザーにとって選択幅の広い製品群となる可能性がある。



Lモード端末を大解剖!

「誰でも扱える」をコンセプトとしているため、液晶も大きく扱いやすくなっている。iモード端末をそのまま大きくしたものと言ってよいだろう。

実際にLモード端末の操作体系はどのようになるのだろうか?ここではNTTの750LDを例に、Lモード端末の操作方法を紹介しよう。

メーカーによって若干操作が異なるが、Lモードのサービスは、おもに「Lボタン」とその周囲の方向キーを利用することになる。iモードユーザーならば「iボタン=Lボタン」と考えれば違和感なく操作できるだろう。



FAX

Lモードにはウェブページなどからリンク先のファックス情報を受け取れる「FAX TO機能」がある。端末によってはメールの内容をプリントアウトできるなど、プリンターとしての機能がある。

液晶画面

4インチ相当の液晶画面を使っているため、iモードと比べて大きく見やすい。現時点で発表されている端末はすべてモノクロ表示だ。Lモード上の画像コンテンツなどの画像を待ち受け画面にする機能などがある。

Lボタン

Lモードのサービスに入るときや、「決定」ボタンとして利用する。Lボタンの周囲は4方向のリング状のボタン。文字変換や、前のページに戻る時などに利用する。

プッシュボタン

現在発売されている端末はすべて、文字の入力はiモードと同様にプッシュボタンで行う。数字や文字は問題ないが、「@」などの記号の出しかたが機種により若干異なるようなので、ある程度の慣れが必要だ。

さっそくメーカー3社が参入!

本体端末は、NTTを含めて4ブランド出揃った。そこで各社に、今後の対応と特徴を聞いてみた。

NTT

他社のOEM提供により3機種のLモード対応端末が発表されている。OEM提供元と機能は変わらないが、NTTブランドの端末だと月額400円程度の定額で保守サービスを受けられる。



機種	NTR730LD
標準価格	54,800円
ブックマーク	10件
着メロ	4和音

www.ntt-east.co.jp/Lmode/page7b.html

松下電器産業

NECとともにLモード対応端末の先陣を切った松下電器産業。付属するコードレス子機が1台と2台のタイプの2機種の普通紙FAX機能付き端末を発表しており、合計で月産2万台程度を見込んでいる。

また、FAX機能なしのコードレス電話機型の端末も年内に発表される予定だ。



機種	松下L1WCL
標準価格	オープン
ブックマーク	30件
着メロ	16和音

www.panafax.co.jp/products/lwcl/contents.html

家庭ならではのコンテンツが満載!

iモードとは違って家庭や主婦向けのコンテンツメニューが用意されたLモード、どのようなサービスがあるかを見てみよう。

Lモードはiモードと同じようにポータルとなるメニュー「Lメニューリスト」からコンテンツを選択してサービスを受けることになる。そのメニューには「出前・宅配」などが見えるが、これらはまさに、固定電話のLモードならではのメニューだろう。

Lメニューリストから検索可能なコンテンツは、サービス開始直後で200程度となっており、そこには家庭に据え置く電話機を端末とするサービスだけでなく、ホームユースに特化したコンテンツが目立つ。家庭の主婦などには特に役立つサービスになりそうだ。天気予報や料理のレシピなど、日替わりで参照したいコンテンツは「今日のチェック」から、直接アクセスできるなどの心配りもなされている点も見逃せない。

コンテンツには接続料金のみで閲覧できる無料コンテンツと、情報料として別途に課金される有料コンテンツがある。有料コンテンツはiモードと同じように、月額固定でのサービスが多そうだ。

なお、NTTが提供する「Lメニューリスト」以外にも、コンテンツ提供会社が独自につく

地域情報

1. 天気予報
2. タウンページ
3. タウンガイド
4. 行政サービス情報
5. お買得情報、イベント情報
6. 交通情報

在宅取引

1. バンキング
2. 証券取引
3. 通信販売
4. チケット予約
5. NTT西日本のサービスの申し込み

生活支援情報

1. 医療・福祉情報
2. 故障修理の連絡先
3. 出前・宅配
4. 料理レシピ
5. レンタル情報

教養娯楽情報

1. グルメガイド
2. ショッピング情報
3. 旅行・スポーツ情報
4. 映画・音楽・書籍情報
5. 美容・健康情報

るポータルを集めた「ポータルズメニュー」も追加される予定だ。これらコンテンツ提供会社別のメニューリストや、それらメニューリス

トに入っていないような一般コンテンツからでも有料情報の提供ができる予定になっているので、新規参入のサービスに期待したいとこ

NEC

端末をNTTにOEM提供するなどLモードに熱心なNECは、子機の台数の異なる2機種 of 普通紙FAX機能付き端末を発表した。

同社は従来から家庭用の電話機についてはFAX付きの製品のみを販売していたので、付加機能付の電話機は得意分野だ。

なお、同社はLモードについて、将来的にはFAXを上回る需要を見込んでいる。



機種名	NECspeax@SPL-N10
標準価格	75,000円
ブックマーク	10件
着メロ	4和音

i2iware.com

シャープ

Lモード対応端末の発表が他の2社より遅れたシャープだが、NTTにOEM提供しているFAX機能付き端末と、FAX機能なしのコードレス電話機型端末の2機種を発売した。

同社は初年度の市場規模を150万から200万台とみている。「シェア30パーセントは確保したい」(ビジネス通信事業部)と、Lモードに対する期待はかなり大きい。



機種名	シャープUX-W50CL
標準価格	オープン
ブックマーク	10件
着メロ	4和音

www.sharp.co.jp/corporate/news/010521-1.html

Lモードを使ってみよう!

それでは実際にLモードサービスに加入するまでの流れを見てみよう。
特別な設定がいらない「誰でもできる」は徹底されているようだ。

あっ! という間の簡単設定

実際にサービスを利用するにはどうしたらよいのだろうか? 専用の端末を用意する必要があるため、申し込みと端末購入のタイミングなど、いざ申し込みとなると意外と迷ってしまうものだ。ここではLモードのサービス加入までの流れをまとめてみたので、申し込みを検討している読者は参考にしてほしい。

① 端末を購入

Lモードの申込書は端末に同封されているので、最初に端末を購入するのが一般的だ。端末はNTTから購入できるが、ディスカウントショップなど小売店でも購入できる。機種や価格を検討して選ぼう。



② 申込書を送ろう

端末に同封されている申込書に必要事項を記入して郵送する。公衆電話からLモードを使いたければ、「Lモードカード」も一緒に申し込んでおこう。

③ 接続しよう

通常の電話機とまったく同じ。写真のとおり裏面には電源コードと電話線のコネクターしかないので、設置に迷うことはないだろう。Lモード開通までも通常の電話機として使える。



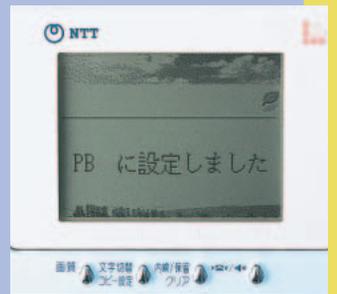
④ 初期設定をしよう

Lモードが開通したら、初期設定を行う。端末のLボタンを押して10秒程度待てば、自動的に初期設定が完了する。SPAMが心配な人は、さっそくメールアドレスを変更しよう。



⑤ 設定終了!

右の画面が出たらもう設定は終了だ。これでサービスを利用できる。Lモードへの接続方法は端末によって異なるが、「Lボタン」を押してサービスに入る方式が一般的だ。なお、アナログ回線の場合は接続までに20秒程度かかる。



ICカード公衆電話はLモードだった！



ICカード公衆電話（写真上）を使ったことはあるだろうか。多くの人が「使いかたがわからない」「テレホンカードと硬貨が使えず不便」などと思って使っていないだろう。実は、この電話にはブラウザが入っておりLモード端末へと早変わりする。使いかたはLモードカードと「ICテレホンカード」を重ねてセットし、カードの申し込み時に登録する暗証番号をプッシュするだけだ。回線はISDNのため接続はかなり早く快適だ。すでに自宅



Lモード1契約につき1枚、有料（500円）で発行してもらえる。申込み時に暗証番号を登録するので、万が一紛失しても悪用される心配はない。

で読んだメールであっても見れるようになっており、自宅と外出先とで情報を共有できて便利だ。これで家族の伝言板といった使いかたもできる。ただし画面の縦幅がやや狭いため、使い勝手は家庭用の端末のほうがよい。

公衆電話からLモードに接続する際の料金の支払いは、Lモードカードと重ねてセットしたICテレホンカードによって行われる。自宅の料金と一括で支払うといったことができないのは残念だが、家庭で設定した情報のうち、



有料コンテンツへの登録などサーバー側に保存されたものは公衆電話からのアクセスにも反映されるので、それらへのアクセスは家庭からと同じようにできる。もちろん、家庭からの接続とまったく同じというわけではなく、天気予報など地域特有の情報にアクセスした場合は、アクセス元の公衆電話が設置してある地域の情報を優先的に出すなど、公衆電話でもコンセプトの1つである「地域に密着した」ものとなっている。

今後のコンテンツ拡充に期待

NTT東日本でLモードを担当している営業部の大賀公子さんに、開発コンセプトと今後の展開について話を聞いた。

Lモードは、「生活実用」をキーワードに、地域、在宅取引、生活支援、教養娯楽の4カテゴリを柱とし、家庭に役立つ情報の提供をメインに考えて開発しました。

実際に端末を利用していただければすぐにわかると思うのですが、パソコンなどの使用経験がまったくなくても、銀行のATMを利用できる人ならば抵抗なく使えるはずです。インターネットどころか携帯電話すら利用していないユーザー層でも安心して利用できるでしょう。

端末については各メーカーサイドで、魅力的な機種を開発してくれているようなので、非常に心強いです。具体的には、256色のカラ

一端末も近々発売されそうですし、来年以降はさらに革新的な端末が発売されるかもしれません。

まだ具体化はしていませんが、Javaなどの技術を利用した端末が登場してくる可能性もおおいにあります。現時点では価格が高めになってしまっていますが、今後徐々に安くなって、近い将来、みなさんの手に届きやすいサービスになるでしょう。

コンテンツについては、当初は「Lメニューリスト」というNTTのメインメニューからのアクセスと、URLを直接指定してのアクセスになりますが、コンテンツの提供事業者が独自のメニューリストを作成することも可能です。今後、弊社とコンテンツ提供事業者がよい意味で切磋琢磨していくことが、このサービスをさらに充実させていくと思っています。

「Lメニューリスト」からアクセスできるコ

ンテンツは、サービス開始直後は200程度ですが、すでに400社から500社からの打診があります。比較的早い時期にコンテンツの充実が実現するでしょう。

コンテンツ提供事業者に対するハードルはなるべく低くしてありますし、現時点で、私自身が1ユーザーとしてみても「これは使ってみたいな！」と思うようなコンテンツが多数あります。予想以上におもしろいサービスになっていくと期待していますよ。





[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp